

第2回 静岡市社会の大きな力と知を活かした根拠と共感に基づく市政変革研究会 会議録	
開催日時	令和5年10月10日(火) 9:30~11:50
開催場所	静岡市役所 新館8階 市長公室 及びWEB(ZOOM)
出席者	池田恵子委員(WEB)、内田晴久委員、黒石匡昭委員、酒井敏委員、神成淳司委員、高尾真紀子委員、谷明人委員(WEB)、橋本正洋会長、森川高行委員、山岸祐己委員
要 旨	<p>【次第1 開会】</p> <p>【次第2 会長挨拶】</p> <ul style="list-style-type: none"> 第1回会議を6月に開催し、約4か月という短い期間だが職員が精力的に進めており、委員の皆さまにもサポートいただいたことをこの場を借りてお礼を申し上げたい。 分科会ごと進捗に多少の差はあるが、これまでの成果を皆さまに披露したうえで、御討議いただきたい。 <p>【次第3 進め方提示】資料1</p> <p>≪事務局≫</p> <ul style="list-style-type: none"> 6月1日に第1回会議を開催し、その際に8つの分科会を設置している。 各分科会では若手・中堅職員が主体となり、委員の先生方からの専門的な意見、助言をいただきながら、政策の立案に向けて研究を進めてきた。 また分科会の開催と並行して、第1回会議において神成委員からご提案いただいたワークショップを実施しており、これについては後ほど説明させていただく。 これまでの過程における分科会での議論を踏まえ、GX分科会及び新共助社会・子育て教育分科会については、会長の了承を得て再編させていただいている。 本日は、まず各分科会の職員からこれまでの検討状況について報告させていただく。 内容としては、①現状と課題、②新たな知見、③今後の方向性、④取組実施による市政社会の効果、について説明させていただく。 その上で、委員の皆様のコメント、助言等をいただき議論を深掘りし、最後に会長からの総括コメントをいただきたい。 今後の予定としては、本日の会議の議論を踏まえ、引き続き各分科会で研究を進めていきたい。 第3回会議の開催については、令和6年3月を予定している。 <p>【次第4 分科会進捗状況報告、質疑応答】資料2</p> <p>(分科会職員から資料に沿って説明後、質疑応答)</p> <p>(1) DX①次世代防災</p> <p>≪谷委員≫</p> <ul style="list-style-type: none"> 難波市長の強いリーダーシップのもと、複数のセクションから若手・中堅職員の方が非常に熱心、真剣、積極的に取り組んでいることに心から敬意を表す。 防災は市民の方々の安全を守るという行政で最も大事な事項の一つと思っている。 実際に起こっている災害に対応しながら検討を重ねたことで、より現実味を増した内容になっている。 橋本会長のご紹介で、法政大学の上山教授と連携したサイネージを活用した実証実験を提

案いただいた。

- ・ 日本 DMC の小栗様からは、おそらく日本では最先端のドローン等を活用した DX 防災について御講演いただいた。
- ・ 方向性に関して、これでまとまっているが、一点、災害が起こったときに責任論に終始して先に進めないことや、責任論を過度に意識して過度な投資をし、他の対策ができなくなることがあるため、現時点でのリスクを客観的に見極め、費用対防災効果が高いもの、特に DX を活用した防災体制の構築に向け、取り組んでいけばいいと思う。

《神成委員》

- ・ よくまとめられていると思う。
- ・ 主要な取組が災害情報の集約と分析となっているので、関係機関と連携して、いかに効率的に情報を提供していくかを合わせて検討していくといいと思う。

《内田委員》

- ・ 災害というのは、計画されたものが動かないというもの。様々な計画を立てることは当然だが、住民の方に、計画どおり必ず動くとは限らない、自分の危機意識を常に持ってください、ということ強く発信しておかないと、対策を立てれば立てるほど、住民の方が安心してしまうので、その点に気がつけた方がいいと思う。

(2) DX②デジタル行政

《神成委員》

- ・ 多くのシステムがある中、棚卸しが一番大変で、様々なシステムが乱立しているのをいかに整理してロードマップを書き、最終的にシンプルかつデータ連携もできて、市民の方に利便性が高い施策を実現できるかがカギだと思っている。
- ・ 幸いなことに静岡市の担当職員が、前向きに議論を進めていただいているので、着実にこの方向で進めていただければと考えている。

《山岸委員》

- ・ 他都市では、現状に対して、市民側のインターフェースをどうするかという取組が多いと思うが、静岡市は、データ基盤を長期的に業務改善やデータ利活用につなげていけるような形に根本的に今から変えていくということで、他都市が踏み込めていないところまで一歩踏み込む素晴らしい提案ではないかと思う。

《黒石委員》

- ・ システムデータの棚卸しは、本当に全然現状何もないのか。
- ・ 中途半端なものもあり、再整理のあり方を検討しないといけない、というのはよくある話だが、今全然やられてないということに驚いた。

《分科会職員》

- ・ まずシステムについては、庁内にあるシステムの名称や、どのような業務で使っているかは整理しているが、具体的にどのような機能があり、どのようなネットワーク構成かなどの状況調査は現状できていない。

- ・ 加えてそれに紐づくデータの棚卸しも現状できていない。

≪黒石委員≫

- ・ いずれにせよ、これは大急ぎでやっていくべき話だと思う。
- ・ 遅れているという認識を持った方がいいと思う。

≪神成委員≫

- ・ システムの専門家だけで検討すると、どうしても形だけになりやすいので、現場にとって本当に利便性が高いもの、市民の目線で使いやすいものということと、部局横断でデータを管理することを、個人情報保護法等も踏まえて進めていければと思う。

(3) DX③都市・交通

≪森川委員≫

- ・ 自動運転・MaaS は、マイカーを使わずとも自由にストレスなく移動できる社会を作るという取組。
- ・ MaaS は日本では民間企業、鉄道会社を中心に取り組んできたが、日本ではすでに IC カードや無料の経路検索ができ、今後行政が関わっていくとしたら、乗務員不足で困っている公共交通を自動運転化していくことに注力すべきだと考えている。
- ・ 政府では現在、2025 年までに 50 カ所でレベル 4、つまり運転手がない自動運転の実装を目指している。委員会に関わっているが、あと 2 年では難しいと感じている。
- ・ レベル 2、つまり運転席に人が座っていても、運転タスクを極めて小さくするだけでも十分役立つ。
- ・ 名古屋大学では、赤青黄の 3 つのボタンを時々押すだけのものを開発している。
- ・ 現在愛知県春日井市では、高齢者による NPO で自動運転車を運行している実績もある。
- ・ レベル 4 を無理やりすぐに目指さずとも、レベル 2 で運転タスクを極めて小さくするような自動運転車を入れて行くという方向性がいいのではないか。
- ・ 徐々に自動運転のソフトウェアや社会の受容性も変わり、レベル 4 に近づいていくという道筋が現実的かと思う。
- ・ 都心部では清水港の現地を案内いただき歩いてきたが、都心部での自動運転に非常に向いている場所だと思う。
- ・ 清水港には今非常に魅力的な港の空間ができていますが、JR 清水駅から少し遠い。
- ・ 昔の貨物用の廃線で、自動運転を走らせるにはいい道があり、制度変更して自動運転で通れるようにしたらどうかと思った。
- ・ 一方で、中山間地域の公共交通状況は非常に厳しく、春日井市の高蔵寺ニュータウンでやっているような、住民が関与する形で自動運転レベル 2 からラストマイル系のサービスを展開していけばいいのではないかと思った。
- ・ 駅前ウォークブルについては、市民の方は、駅を出てすぐに地下街に入り、御幸町通りの大きな交差点で地下に潜る、ということが当たり前になってしまっているかもしれないが、ビジターにとっては驚くところがある。
- ・ せっかく魅力的で立派な街があるのに、そこへ行くためにいきなり地下街に潜らないといけない、また、御幸町通りのような中心となる道路を 2 箇所も地下に潜らないと横断できない、というのを何とかしたい。
- ・ ウォークブルな街になるよう改善をしていくためには、自動車交通をどうするかというこ

とが非常に大きな課題。

- ・ 同時に迂回路を検討しながら進めていくため、非常にチャレンジングではあるが、なんとか静岡市を魅力的なまちにしていくための課題だと思い、今後取り組みたいと思っている。

《山岸委員》

- ・ 自動運転・MaaS、ウォーカブルの両提案とも、全て今すぐにでもやっていくべき。全面的にやっていこう、ということで、データや統計といった側面で協力できればと思う。
- ・ AI、統計モデルを使った未来予測は、正直占いのようなものなので、できるだけ過去にさかのぼったデータを使い、これまで市民のニーズがどう変化してきたか推測するところからスタートする。
- ・ 過去に起こったことは事実なので、それに基づいて、これから注力すべきこと、優先的にやる次の一手などを決めていければと思う。

《黒石委員》

- ・ 資料に書かれていることには大賛成で、一刻も早くやっていくべきだと思う。
- ・ 実は、都市交通 DX、MaaS の世界で一番難しいのは、モーダルごとの経営主体者との意思統一、調整だと思う。熊本市などでもその問題に立ち向かい頓挫もしている。
- ・ 現状、静岡市で電鉄、タクシー、バス、ラストワンマイル事業者との共通合意状況がどうなっているのかお聞かせいただきたい。

《分科会職員》

- ・ MaaS に関しては、移動サービスをつなぐ取組を行ってきたが、交通機関事業を持つ事業者が、いつ投資できるのかが非常に重要になってくる。
- ・ 森川委員から、民間投資のタイミングもある中で一緒にやっていかななくてはならない、そこまで待つ必要がある、といった助言をいただいている。

《森川委員》

- ・ データの連携は非常に遅れていると思っている。データの連携は行政が取り持ちできると思う。静岡市の場合は、民間の交通事業者が多いというわけではないので、行政が中心となりデータの連携が必要なところはぜひ今後進めていければと思っている。

(4) BX

《山岸委員》

- ・ 早稲田大学と連携して、AI・データサイエンス、物理的なシミュレーションやバイオ・ゲノムといった離れた学術分野をどのように既存の産業に対して還元していくかを考えるとともに、新しい産業、イノベーションをどう誘発していくかも、一緒に考えていければと思っている。

《内田委員》

- ・ 清水港を擁する静岡市にとって、駿河湾、海に面している地形は世界にも類を見ないほど特色があると思っているが、まだ十分に生かされていないと思う。
- ・ まずは観測やデータ集積をすることにより、様々な産業、養殖や物流あるいは防災にも活用する下支えをする基盤づくりをすることで、研究活動を通じて人が成長する場として非

常にポテンシャルが高い地域だと思う。

- ・ 具体化していくことが非常に大きな課題だと思う。様々なものが横にも全部繋がっていると思うが、具体化できて安心安全な豊かな地域づくりに寄与できるような取組になっていくといいと思う。

≪橋本会長≫

- ・ 県や国とも今後協力して進めていかなければならない方向性なので、引き続きご協力いただき議論を進めていただければと思う。

(5) GX①脱炭素社会

≪橋本会長≫

- ・ 1つは応用範囲のところで、DAC を藻場形成や、ブルーカーボンのプロジェクトに活用することをご検討いただいているが、非常に今後期待できると思うので、ぜひ研究開発も含めて、実証をお願いしたい。
- ・ GX、脱炭素は非常に広い分野だが、今回は DAC に集中してご検討いただいた。
- ・ 並行して、来年、再来年には、ほかのテーマもありうると思うので、関係の皆さんのご意見を伺いながら検討を進めていただきたい。

≪内田委員≫

- ・ 脱炭素社会というテーマなので、一方では CO2 を回収していくことも重要なポイントで、現状の静岡市としての CO2 排出量を把握しておくことが大事だと思った。

≪分科会職員≫

- ・ 今、静岡市の温室効果ガスの排出量の推移は、若干削減傾向にあるものの、まだまだ目標達成に向けては、いろいろな取り組みを進めていく必要があると考えている。
- ・ また、中身については様々な燃料利用などを試算しているため、今ご意見にあるとおりどのぐらいの排出量をどの分野という部分も含めて、しっかりと分析を進めていきたいと思う。

≪内田委員≫

- ・ 特にエネルギーが多いと思う。エネルギーの代替について、具体的な取組の計画はあるか。

≪分科会職員≫

- ・ 静岡市は、令和4年4月に脱炭素先行地域に指定されており、再エネの利用も進めている。
- ・ 熱の部分については、なかなかガスからの転換が難しいところがあるが、県とも連携を図りながら、水素の利活用の推進にも取り組んでいるので、エネルギー対策も進めていきたいと考えている。

≪難波市長≫

- ・ 取組としては非常にいいと思うが、脱炭素については他にもいろいろ取り組んでおり、DAC しか取り組まないように見えるので、資料の作り方、見せ方をしっかりしていきたいと思う。

(6) GX②農と食

≪神成委員≫

- ・ 農業は今非常に厳しい状況にあるが、逆にこれから数年、地域ごと取組によって大きく状

況が変わってくると思う。

- ・ 生産現場だけで解決できるものは少なく、流通含め全体的にどうやっていくのか、新しいモデルを作っていかなければならない。
- ・ 国内でもいくつか事例はあるので、そういったものを比較しながら、静岡ならではの方法を、集中的に関係者の方が集まって、早期に確立して展開していくことが必要だと考えている。

《酒井委員》

- ・ 農業経営体数がほぼ半減という話だったが、自給率で見るとそれほど下がっていない。
- ・ これは規模が大きくなっているということで解釈してよいか。

《分科会職員》

- ・ 1つには、食料自給率そのものにそこまで影響しなかったというのが、静岡市は生産規模自体が大きいので、食料自給率への影響は少なかったと考えている。
- ・ 例えば、一大生産地、大規模の生産地の割合がどうしても大きくなってしまいうので、静岡市内のものを食べていない方が多い状況だと、静岡市の農家が減ってもあまり影響がないという結果にはなってしまうと思う。

《酒井委員》

- ・ 都道府県別の自給率で見ても減ってないということか。

《分科会職員》

- ・ そういった意味では、集約が確実に進んでいる。
- ・ 今まで地域で農業をしていた方がどんどん辞めてしまって、とてもやる気がある若手の方にやってくださいとお願いし、そこにどんどん集まってしまいうという状況は、実際に発生している。
- ・ しかしそういった方の声を聞くと、これ以上は抱えきれない、人手も足りないというところ、耕作地の条件もあり、集約していく中で、だんだん悪い農地を切り捨てていくということが、今まさに始まっている状況。

《酒井委員》

- ・ 小さい規模でも成り立つようにというのがポイントと理解してよろしいか。

《分科会職員》

- ・ 難しいところだが、集約は当然図っていかなければならないというのが全体としての方向性ではある。
- ・ しかし、集約していく中で、どうしても静岡市の場合、農地の広さに制約があり、中山間地の農地は、集約していくと単純に見捨てるような形にもなりかねない。
- ・ 特徴ある農業を守っていくことができないという中で、小さな農業でも、有機農業、あるいは面積が小さくても収益を上げることが可能な施設栽培、いわゆるハウスを使って栽培している方々もいらっしゃるの、そういった方も含めて、我々支援しなければならないと思う。

《難波市長》

- ・ 小さな農地、耕作放棄地がバラバラにあって、それを集約すれば大規模化できるが、その集約が今できていない。
- ・ 例えば、100ある中の50は集約して使って、残りの50は違う用途に転換する、そのうち

の50は生産性を上げて、その生産量自体は下がらないようにするとか、そういう取組をしていかないといけないと思っている。

- ・ 全部の農地を守ることは無理で、農地がこれからもさらに減るということが前提の上で、農業が儲かるよう生産性を上げる、施設園芸などを入れて楽にできるようにする、その2つを組み合わせさせてやっていく必要があると思っている。

《青木助言者》

- ・ 資料2-6②の③の方針が示す地域循環システムの構築は農業だけでは難しい。また、よく6次産業化とも言われているが、静岡でこういうシステムを作るときに、農業以外の二次産業、三次産業、どの辺に期待があるのか、ご教示いただきたい。

《分科会職員》

- ・ 特に我々今期待していて、すでに声をかけ始めているのが、技術を持った企業はもちろんだが、特に小売業の方々、市内のスーパーや量販店ででの取り組みが極めて重要だと考えている。
- ・ また、二次産業、一次産業で言うと、現在出ている残渣など、まだまだ市内で有効活用されていないものが多くあると伺っているので、そういった今まで捨ててしまっていたものを農業で有効活用して循環していくという点で、二次産業、三次産業には積極的にアプローチをかけていきたいと思っている。

《神成委員》

- ・ 外に売る仕組みを作ることを考えていかなければならない。
- ・ そういった意味では、流通との連携をきちんとやることによって、輸出も見据えた形で外からきちんとお金を稼ぐ仕組みを作らないといけない。
- ・ 市長のコメントのとおり、規模に応じていろんな取り組みをしていく必要はあるが、ある程度の規模があれば、集約しなくても儲かるものというのは、作目をきちんと選び、それをブランド化していくことで十分可能になると思っている。
- ・ その辺を具体的に議論していくことが重要と考える。

(7) ウェルビーイング

《高尾委員》

- ・ このウェルビーイング分科会というのは、他の分科会とやや異なるところがあり、福祉部局の方が中心になり、全市的な内容まで全て網羅しているということと、データ解析が中心で具体的な施策・事業を行うものではなく、大変議論が難しいものだった。
- ・ その中で、担当職員が非常に精力的に検討を進め、思いを込めて提案して頂いている。
- ・ 地域幸福度指標は、見るだけで面白いものがあると思うが、まずはこういうものをきちんと分析して、エビデンスを重ねていく、スマートシティ・インスティテュートの調査は詳細な分析を実施するには少ないサンプル数のため、継続的に市でもアンケートを取っていくことが重要だと思う。
- ・ それを全庁的に総合計画などに位置付けていき、進捗を見ていくというところもこれからやっていただければよいと思う。
- ・ 今回特に資料②の指標を見ていただきたいが、先ほど説明があったように、多くの因子が客観指標は高いのに主観指標が低いというところがあり、もちろんそれは市民の方の奥ゆかしい性格というものもあるかと思うが、なかなか自分では他の良さが分からない点もある

し、行政からきちんと伝えることができていないという面もあると思う。

- ・ それからもう一つは、行政が考えていることと市民が届いて欲しいと考えているところが、もしかしたらずれているかもしれない。
- ・ 主観指標を上げていくことが1つは重要で、もう1つは、客観指標が低いところ、特に目立つのが、多様性と寛容性という項目で、女性の活躍、障害者の活躍の指標が大きなところで、ここについては早急に検討していく必要があると思う。
- ・ いろいろな分析指標を見ると、この多様性と寛容性というのは、地域の繋がりとも関連が強いし、地域の繋がりというのは、幸福度全般とも大変繋がり強い因子なので、こういうところを重点的に検討していただければよいのではないかと。

《黒石委員》

- ・ 大きくわけて2点申し上げたい。
- ・ ウェルビーイングという概念自体が、未成熟で開発途上。
- ・ ただ、我々が20年間付き合ってきた政策評価、行政評価という概念から、もっと上流のアウトカム的な概念に着目してやり直そうという機運なので、いろいろな施策がウェルビーイングに対して複層的に寄与していくという構造で、すなわち従来型の縦割り構造では対応できない。
- ・ これが重大、重要な現状認識だと思っているので、今回精力的に担当職員が勉強してきたが、こういうことを市政に活かしていこうとなると、まず勉強をちゃんとして研修をして市民アンケートを取って、そして分析して、着手するのは4年後、みたいな話になってしまう。
- ・ これが行政経営の一番悪いところなので、本当に大事な話だし、市長、副市長、幹部職員とも一体となって進めていかないといけないので、兼務でなくて専属的に、それこそ市長直轄みたいな部署でその分析、調査を進める、それから部署間調整を進める、ということをする体制構築が行政マネジメント的にも必要だと個人的に強く思う。
- ・ プラス外に対するパブリックリレーション上も、そこまでの覚悟を示すということが、市民に対する強いアピールポイントになるかと思う。
- ・ 足の速い民間の経営企画は何ヶ月かで全部やり、どんどんローリングしながら変えていく。
- ・ もちろん中長期的な目線も必要だが、従来型のあまりにのろい行政の慣習にしばられることなく、機動的な動きができる体制構築を、ぜひ市長にご検討いただきたいということが1点目。
- ・ もう1つ重要なのは、都市交通もGX農と食も、いろいろな市民にかけがえのないインフラ経営の大きなセクターでそもそも瓦解し始めているのが現状。
- ・ 新しい担い手に関わってもらわないといけないし、新しい参画力を高めてもらわないといけないし、これまでの従来型の補助システム、助成システムではない形に振り子を振っていかないといけない。
- ・ 先ほどの公共交通もそうだが、行政がプラットフォーム整備をできていないので、それはマストだが、その上でどういうプッシュ型の施策を打っていくかを考えないと、今は民間企業に任せていても動かない。古き良き時代のリスクをテイクできた時代ではない。
- ・ 官民連携、産学官連携という言葉は綺麗で美しく、皆さん賛成するけれども、結局核論になるとリスクを取り切れずに皆逃げて行ってしまい、本当の成功事例はそんなにないと

思っている。

- ・ なので、これはまた市長に対してだが、市としてどこまで覚悟を見せるか、本気度を見せるか、それこそ例えば今までの補助金をお金の流れを変えるぞというぐらい見せるか、そういうものとセットでないと、本気の官民連携、本気の産学官連携はできない。
- ・ どこも同じようなこと言っているので、どこもそういうプレーヤーを誘致したい、なので、本当に自助共助公助のあり方、行政のあり方を変えるぐらい思いをもって、本気で取り組むのであれば、本気を先に公共としても見せて、本気の民間、本気の大学にも動いてもらう。そういった動きが強く必要だと思うので、ウェルビーイングという概念論から差し出がましい意見になってしまったが、そういったところまで踏み込んでもらいたいと思う。

《池田委員》

- ・ 素晴らしい結果を非常に分かりやすくまとめていただいていると感じた。
- ・ 資料②のチャートだが、この結果を年代別、性別でみる事ができれば、静岡市の若年層がなぜ流出して帰ってこないのかという課題について、主観的な捉え方や、特に子供をこれから産む世代の若年女性の傾向などの把握ができれば、もう少し具体的な施策に結びつくような成果が得られると思う。

(8) デジタルヘルス

《神成委員》

- ・ 国内どこでもテーマになっているが、現役世代がきちんと健康増進しないといけない。
- ・ 高齢者も、地域の方々と一体となって取り組むために、今回はデジタルデバイスの活用に着目して、市としてある程度取組を進め、社会全体での実装に向けて進めていければと思う。

《高尾委員》

- ・ 取組自体はいいことだと思うのでぜひ進めていただきたい。
- ・ 認知症は、80代後半から上になるとある意味、誰もがかかるものだと思う。
- ・ 認知症との関連が指摘されている危険因子のうち最も大きいのが難聴で8%ということは、こうしたら認知症にならないという予防法は、今の科学では無いので、質の高い介護サービスと書かれているが、認知症になってもきちんと地域の中で質の高い生活ができるということを目指すべきだと思う。
- ・ そのためにDXがどう役立てるかという観点からもぜひ考えていただきたい。

《神成委員》

- ・ 介護の取り組みには、高尾委員の意見も入っている。
- ・ 今までは週1回のデイケアの日以外は健康状態を確認できていないが、今後、生活の質を上げるために、エビデンスベースで健康状態を見える化し、個人の特性に合ったサービスを充実させていく。

《橋本会長》

- ・ エビデンスベースと書かれているが、この資料だけではエビデンスが少ないので、非常に広い施策を対象にしていると思うので、エビデンスをちゃんととることと、それに対して施策の効果、分析を、中長期的に考えていく必要がある。

(9) 新共助社会

≪池田委員≫

- ・ 積年の課題について、何か切り口があるのかというところで、苦労して時間をかけて議論することができたと思う。
- ・ 私の方から、難しいと思う点も含めて申し上げたい。
- ・ 人口が減り、自治会の加入率が減っているという現状がある中で、業務の棚卸しをしなければならない。
- ・ 担い手が変わったら、同じ業務を担い続けることは難しいということは、皆分かっているが、それをどのようにしていいかは分からないし、やっていいのかも判断ができない。
- ・ そういう状況にある地域に対し、行政が手法を伝え、やっていいことの後押しをしていくことがこれから必要になると思う。
- ・ 今回提案があった相談員や AI の地域なんでも相談、課題解決モデルを実施していくときに、どこまでその地域自治体という地縁組織を主眼に置き続けるのかという点について検討していく必要がある。
- ・ 地域にはテーマ型のコミュニティもあれば、地縁組織もあり、この2つは同じ原理では動いておらず、意思決定の構造や課題の把握の仕方も全く違うため、この2種類が繋がっていないと思う。
- ・ それを繋げていくのは行政の役目ではないかと思う。
- ・ これまで特に静岡県、東海地域だと思うが、地縁組織との関わりの比重が大きかったと思う。
- ・ NPO の活動で少し専門性がある団体は、なかなか地縁組織と繋がって活動することが難しかったかと思うが、それを今回提案があった相談員などが、みんなの顔を知っている存在として繋いでいくことができれば、共助のあり方がだいぶ変わってくるのではないかと考えている。
- ・ 最後のポイントは、自治会の加入率や担い手の年齢層の変化は、ある程度、これからシミュレーションが可能ではないかと思っている。
- ・ どこまで地域自治会が頑張り続けられるだろうか、ということが非常に不安なので、デジタル化などで強化していきながら、持続可能な地域社会について、関係者とコミュニケーションしながら考えていく必要があると思う。

≪難波市長≫

- ・ これはみんな問題だと思っていたと思うが、誰も手をつけてこなかったこと、そして自治会の皆さんにずっとお任せしてきた部分。
- ・ けれどこれ以上、あと5年は続かない、というような状況なので、非常に難しいテーマですぐ答えが出るというわけではないが、とにかく手探りで、一歩でも前に進んでいくのが大事かと思う。

(10) 子育て教育

≪高尾委員≫

- ・ 資料②を見ると、静岡市では切れ目のない支援、また困難を抱えているこども、若者への

支援が行われているという風に思う。

- ・ ただ、先ほどウェルビーイングの資料にあったとおり、子育て支援のところは、客観指標では高いが、主観指標が低いという典型的な指標。
- ・ そういう意味で、もしかすると静岡市でやられているいろいろな取組が、実際に子育てをしている世代や、これから子どもを持つかどうかと思っている若い人たちに届いていない可能性もあると感じた。
- ・ 今回、当事者の声をきちんと聴くことでいろいろな発見があったと思うので、もしずれていることがあったら、データに基づいて取り組んでいただきたい。

《神成委員》

- ・ 資料②にも入園審査のデジタル化とあるが、市としては共通に作っていくべきものだと思うので、デジタル化推進課とも議論しているが、うまく連携して個別に作る事が無いように、この辺も含めた効率化を、それぞれの分科会の横ぐしで進めていければと思う。

《山岸先生》

- ・ 先ほど高尾委員のコメントにあった子育てもウェルビーイングも、問題の前提としている偏差値が、果たして本当に市民の意見が反映されているものなのか、疑問視している。
- ・ 提示された偏差値の見方だと、平均的な人を疑似的に作り出して、たまたまその人だけを調査したような指標になっており、値としてはそれぞれの項目の全体平均にぎゅっと寄ってしまっていて、意見として差が出ていない。
- ・ 本当は何百人、何千人と聞いているかなり大切なアンケートだと思うので、サンプルサイズなども考慮して、どのように指標化するかということから取り組まないと、市民が理解していない、満足していない、こういうことに困っている、という前提条件が間違っている可能性があり、そこから議論したいと思った。

《橋本会長》

- ・ ぜひ山岸委員にもご指導いただきたいと思う。
- ・ この分科会は非常に広い範囲での検討を宿題として持っていて、ここまで整理されたということは非常に素晴らしいと思う。
- ・ ただ、神成委員のコメントにあったように、他の分科会、あるいは他の部局とのかかわりも非常に多いので、研究会を中心に横ぐしを刺してそれぞれ検討を進めたいと思うし、逆に子育て教育分科会から他の分科会に宿題を出すなど、そういう意識で進めていただければと思う。

【次第5 その他（職員ワークショップの報告）】資料3

《事務局》

- ・ 6月1日の第1回会議において、神成委員から、職員が自分事として課題をとらえ、政策を考える意識づけを行うことを目的としたワークショップの実施について、ご提案いただいた。
- ・ 第1回から第5回まで、6月から8月に渡り、計5回のワークショップを開催した。
- ・ 目的・効果としては、若手職員の次世代リーダーとしての視座の向上や、所属の枠を超えて様々な視点から行政課題を議論し、主体的に新たな事業立場に取り組んでいく意識醸成

などを掲げてきた。

- ・ 合計 30 名の職員で構成をし、6 班に分かれて議論を重ね、8 月 23 日に発表会を実施し、その内容をもとに、市長からもコメントを受けた。
- ・ 発表テーマは多岐に渡るものを職員から発表させていただき、今後具体化を進めていきたいと思っている。

≪神成委員≫

- ・ 第 1 回会議において提案し、橋本会長にも認めていただいた上で、山岸委員にも協力いただき、全 5 回のワークショップを開催した。
- ・ 30 名の職員の方々も、それぞれ本来業務がある中、熱心な議論を重ねていただいた。
- ・ 最終回の 8 月 23 日には市長にご参加いただき、全 6 班から発表いただいたあとに、各発表内容について市長と私の対談形式で今後の方向性について議論した。
- ・ 基本的には、市長からは 6 つの取組について全部進めるべきだというコメントがあり、今後具体的に着実に進めていければと思う。
- ・ 私もちんとフォローアップしていきたい。

≪橋本会長≫

- ・ 改めて神成委員のご努力にお礼を申し上げたい。

≪山岸委員≫

- ・ 様々なテーマで、職員が意欲的にディスカッションする場であったと思う。
- ・ 転職で入庁した職員が、生え抜きの職員が持っていない視点や考え方を提案するなど、活発な議論がなされており、そういったコラボレーションが非常に印象的だった。

(全体を通じた委員コメント)

≪高尾委員≫

- ・ 部局をまたぐというところについて、今回お聞きして、例えば子育て教育のほうで学校給食の無料化の話があって、なかなか予算的に難しいということだったが、一方、GX②農と食 分科会では、学校給食に規格外や有機の食材を使っていくという話があった。韓国のソウルで地産地消の農業の予算を使って学校給食を無償化したと聞いている。
- ・ また、例えば、中山間地域の交通の取組によって、お年寄りの方が外出するようになり、デジタルヘルス分科会で取り上げていたように、外出により健康が維持されることがわかれば、交通にかかる予算が増えても医療費は下がるという議論にもなると考えられる。
- ・ 今回の様々な提案を他の分科会の提案と繋げていくことも考えていただきたい。

【次第 6 会長総括コメント】

- ・ 4 か月強の期間の中で、成果が上がっていたのではないかと思います。
- ・ 特に委員の皆様には、当初お願いしていたように職員に寄り添って検討を進めるという態度に終始していただき、職員も非常にやりやすかったのではないかと思いますので、改めてお礼を申し上げます。
- ・ 今回は、先ほど議論があったとおり、行政がわかっていなかったことは何か、わかるべきことは何かというところを、かなり網羅的にあぶり出すことができ、棚卸しできていな

いところも含めて、検討課題がだいぶ明らかになってきたと思う。

- ・ 今高尾委員がおっしゃったように、分科会だけで市の行政の全部を網羅しているわけではないが、分科会同士でもかなり重なりがあり、関係が非常に深いことが今日の発表で良く分かったと思う。
- ・ 横ぐしを刺す、市の行政の全体を俯瞰して、それぞれに一番より良い解を出す検討を進めるにあたり、この研究会は非常に価値があると改めて実感したところ。
- ・ 私からのお願いは、もちろん行政なので、自分の目の前にある仕事に対する責任があるので、そこを重点的にやることは当然としても、引き続き他の部局とも連携して、横ぐしが通った政策をやる、あるいは隣で起きている課題を無視しないで、むしろ手を差し伸べるなど、そういう態度で今後も検討を進めていただきたいというのが1つ。
- ・ 次に、今回エビデンスベースということで、精緻な分析を進めていただいております、非常にいいことだと思うが、これについて、よくありがちなのは、シンクタンク等にお願いして結果をそのまま批判なく使ってしまうということ。
- ・ シンクタンクをお願いすること自体はいいと思うが、自ら学んでその意味をよく確かめた上で分析すること。
- ・ 市の職員の能力を、研究会等を通じてさらに高めていただいて、行政に生かしていただくことが重要なので、これを機にさらに研鑽していただきたいと思う。
- ・ この研究会は、私としては職員の能力向上に寄与していると思うので、今回若干の再編があったが、年度末に向けて、足りないところがあればさらに検討課題も増やしつつ、市長のご指導を受けながら進めていきたいと思うので、委員の皆さま、市の職員の皆さまには引き続き頑張ってくださいと思う。

【次第7 市長コメント】

- ・ これまでの成果について、非常にいい中間報告だったと思う。
- ・ 委員の先生方には、職員に寄り添ったご指導ご助言をいただき、感謝申し上げます。
- ・ 職員は、特に若手中堅を中心に精力的に仕事をし、これだけ良い結果が出たことに私自身感動している。
- ・ 改めて全体の話を見ると、社会の大きな力と知を活かした根拠と共感に基づく市政変革研究会、という長いテーマだが、今日の話聞き、社会の大きな力を使い、活すことと、世界の知を集めるということに非常に意識が集中していたのは、いいことだと思う。
- ・ 市政変革研究会と言っているが、何が市政変革なのかというと、政策の作り方、実行の仕方を変えていくことが市政の変革だと思っている。
- ・ まずは若手中堅職員が、自分が政策を作るという形で研究をずっと重ねていること。
- ・ 2つ目は、子育て教育分科会のような、部局横断的な政策作りをした例が今まであまりなかったこと。
- ・ 3つ目は、アンケートなども含め、現場をしっかりと見て、一体どういう社会課題があるのかを認識すること。
- ・ これに基づき、根拠をしっかりと示し、データあるいは市民の声を分析して根拠を作り、問題点や今後の取組について社会に示し、共感を得るという方法が、市政の変革の形だと思っている。
- ・ 私自身このように意識していたわけではないが、今回職員が頑張った結果、このような報告がなされたことは、市政の変革に繋がっていると思う。

- ・ 持続している幸せ感のようなものがウェルビーイングだと思うが、結局、市政の取組により、市民の持続している幸福感を高めていくことが大事だと思うので、これから指標を作り、幸福感をあげていく取組を市政として打ち出していく必要があると考える。
- ・ 指標の結果を公表すると、客観的に遅れているところがわかり恥ずかしいこともあるが、それを示しながら、皆で力を入れて取り組んでいくことが大事かと思う。
- ・ 子育て教育の分野は典型だが、何か一つに取り組めばいいということではなく、ありとあらゆることをやっていかないといけない。
- ・ 高尾委員からもご指摘があったが、何に取り組むか選択していくことによって、より効果的な取組が生まれ、他の効果が低い予算を見直すことができるため、政策づくり、執行、そして効果の確認をどのように進めていくかも、これから考えなければいけない。
- ・ 黒石委員からもコメントをいただいたが、政策を作って終わりではなく結果を出すことが大事で、そのためには今までのやり方を相当大胆に変えていくことが必要だと考える。
- ・ どこに課題があるのかという根拠をしっかりと分析し、取り組みによりどのような効果があるのか確認しながら市政を運営していくことがこれから必要かと思う。
- ・ 結果が出るのは10年後、ではなく、小さくても一つ一つできることからすぐ取り組んでいくことが大事だと思う。
- ・ 例えば、自治会も含め社会全体の力を今の時代に合わせてどう共創に使うか、という新共助社会分科会のテーマは非常に難しいので、市政変革研究会での議論を続けていかねばいけないと思う。
- ・ 委員の先生方にはぜひ末永くお付き合いいただければと思う。
- ・ 職員は大変だとは思いますが、自分が関わったものが、小さくてもいいから政策になり、それが実行に移されて、社会になにかいい仕組みができて、みんな喜んでくれるという、小さな成功体験を繰り返していくことが非常に大事だと思う。
- ・ 黒石委員から覚悟を持つようにと言われたので、勉強や研究に終わるのではなくて、結果を出す覚悟を私自身が持って進めていきたいと思うし、みんなの結果を出していきたい。

【次第8 閉会】

以上